

着物を中心とした染織文化に関する技法材料の現状調査
Investigation of the Technique and Material
about Dyeing-and-weaving Culture Including a Kimono

瀬藤 貴史^{*1+}, 野口 都^{*2+}, 阿部 明花^{*3+}
Takashi Seto^{*1+}, Miyako Noguchi^{*2+}, Sayaka Abe^{*3+}

*1 桜美林大学 総合文化学群 造形デザイン専修
Visual Arts Program , J.F.Oberlin University
埼玉県鴻巣市南2-10-30

2-10-30 Minami Kounosu-city, Saitama, Japan

*2 東京藝術大学 染織研究室

The Textile Arts Course, Tokyo University of the Arts

*3 柏美術学院 カシビアートサロン漆工芸

Urushi-Art Course, KASHIBI ART SALON, KASHIWA ARTS SCHOOL

⁺服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: This research investigates for the new possibility and succession of traditional Japanese dyeing-and-weaving culture. We treat carefully the feeling of the value in the traditional culture. We explore possibility in Japanese culture for education or regional improvement. We have to treats carefully the technology and the sense of values in traditional culture. And we have to tell traditional culture.

はじめに

染織文化に関する伝統的な技法材料の現状調査をおこなう事は、多くの可能性の基礎研究となる。インターネットが発達し、世界を緊密に繋げる現在。各地域の文化は注いだ色が混ざり合うように融合し、新しい色を生み出そうとしている。この調査の根底には、他の文化と表現という点において近づいた場合、何を持って『らしさ』を求めてゆくのだろうかということも含んでいる。また、日本という地域に育つ染織文化の現状の声を集めることで、貴重な技術の保存や継承に対してどのようなアプローチをすべきかを考える資料とする。この研究調査活動の結果を広く公開することで、日本の伝統的染織文化を支える技法材料や道具、地域伝統工芸の保存や継承活動の動きを支える一助となることを目指したい。

*1) takashi-mail@cello.ocn.ne.jp

配当決定額

| | |
|----------|-------------|
| 平成 23 年度 | 500,000 円 |
| 平成 24 年度 | 500,000 円 |
| 合計 | 1,000,000 円 |

研究の目的

着物を中心とした服飾文化あるいは、染織文化において、その創造の根底を支える糸、織機、刺繍針などの各種道具。また、染織文化の技法研究に欠かせない伝統的技法、材料などについて技術者より取材調査をおこなう。地域伝統工芸、あるいは伝統的な技術を用いて制作されている染織工芸の技術の現状を調査し、日本の服飾文化、染織文化を支える現状を把握することで、今後の日本らしさを考えた制作や表現の基本資料とする。

本研究における調査研究を通して、現場における今後の材料供給に対する不安や抱えている諸問題、技術の継承などについて現状を把握し、伝統的な技法を有する染織文化の一助となると考える。有形の染織文化財等に関しては、各方面からの研究成果もあり、年々、効果的な保存修復技術が研究、開発されている。しかし、無形である伝統技術を保存、継承するような場は限られており、その技術的な貴重さは認められていても、人材育成、技法材料の研究、道具、材料などの入手経路の確保など困難に直面している点が、年々、多く見られるようになった。

本研究は、前述のような状況を調査記録することで、どこにどのような技術者や材料、道具が存在しているのかを把握することを目標とし、また、本研究を通過して、地域社会へ広く情報発信をするための基礎資料となることを目指している。

小学校では平成23年4月から、中学校では平成24年4月から、文部科学省が制定する新学習指導要領が全面実施される。新しい学習指導要領の中では、伝統や文化に関する教育の充実という観点から改訂され、ポイントとしては「そろばん、和楽器、唱歌、美術文化、和装の取り扱いを重視」[1]と記載されている。その内容に関して小学校、中学校学習指導要領第一章、総則、第1—2において、「...豊かな心を持ち伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに...」[2][3]と記載され、今後、教育として伝統工芸も重要な役割を担う可能性も考えられる。教育における活用のためには、国や県という大きなカテゴリーの中での位置情報だけではなく、生活地域という単位での文化の発信とそれにまつわる情報入手の方法が不可欠と考えている。

以上を踏まえ、本研究は、染織文化に関する現状を把握し、貴重な技術、歴史、世界観を見つめ直し、伝統文化を守ると共に、新たな活用(教育やデザインなどの分野)を産み出す一助となることを目的とした研究である。

研究の方法

取材許可をいただいた工房、または技術者から聞き取り調査を行い、実際に制作作業で使用している道具や技法などについて記録をおこなう。現場における今後の材料供給の不安や現在抱えている問題、技術の継承についてなど、染織に関わる伝統技法の技術継承と育成を考えるための情報として抽出する。

記録方法としては、ICレコーダー、デジタルカメラ、デジタルビデオカメラなどを使用し、直接ヒヤリング

調査をおこなう。録音、録画した記録を基に文字化し報告書としてまとめる。

(報告書までの流れ) 技術者へのヒヤリング調査&撮影→記録内容の文字化→報告書として作成

研究で得られた成果を外部に発信する方法として、文化学園大学 学園祭における文化ファッション研究機構 研究発表ブースにおける伝統技法材料の実物展示、およびワークショップをおこなう。研究最終年度には、独自報告書を作成することで現場の声を広く伝えられやすい形を提供することとする。

(調査内容)

- 使用している技法材料の現状
- 制作に用いる道具、材料の入手、加工など
- 制作をとおしての現在の状況

(調査方法)

- 選定した関係者へ聞き取り調査。ICレコーダー、デジタルカメラ等を用いた記録撮影。
- 関係者から得られた資料などを基にした現状調査

(情報発信方法)

- 2012年11月 文化学園大学 大学文化祭 文化ファッション研究機構展示ブース
- 2013年11月 文化学園大学 大学文化祭 文化ファッション研究機構展示ブース
- 2013年3月 取材先をまとめた報告書を作成し配布
- 2013年2月 FCCLサーチ 服飾文化情報検索 古典技法継承者一覧 Web サイト

(※ 派生的研究協力)

研究の実施計画

【23年度】平成23年9月～3月

研究調査先 (※順不同)

- ・ 日本刺繍技術者(絲工房 結衣)聞き取り調査。(東京都)
- ・ 藍熊染料株式会社(染料問屋)聞き取り調査。(東京都)
- ・ 絞り技術者 聞き取り調査。(埼玉県)
- ・ 埼玉県熊谷捺染組合 聞き取り調査。(埼玉県)
- ・ 京都友禅(應壽)聞き取り調査。(京都府)
- ・ 染織 iwasaki (伝統的な織機による手織 天然染料染色)聞き取り調査。(山梨県)
- ・ 紅花組合(山形県)

※ 調査取材先は、自然災害や調査先のご都合などにより変更の場合あり。

研究調査協力願いを出し、聞き取り調査を行う。着物、染織工芸などを制作する上で、今後、技法材料として不安な部分を抽出するとともに、着物などを制作する上で、あまり知られていない、材料や道具などを調査報告する。実際に、道具や糸などを制作する技術者の方から、その技術を拝見させていただき、レコーダー等で録音し記録とする。

- ・ 10月～2月:取材許可を頂いた、工房などに赴き調査取材をおこない現状の把握に勤める。
- ・ 11月:文化学園大学 学園祭時に、文化ファッション研究機構研究発表会場にて、染織を制作する上での道具材料などの展示をおこなう。
- ・ 展示会場までの輸送費・印刷代などが必要となる。
- ・ 12月～2月:取材許可をいただいた工房などへ取材に赴き、取材を継続するとともに、本年度の報告書作成をおこなう。

【24年度】平成24年4月～3月

研究調査先 (※順不同)

- ・ 型染伝統技法 斎藤孝子 氏(染色作家)聞き取り調査(神奈川県)
- ・ 染織 iwasaki(伝統的な織機による手織 天然染料染色)聞き取り調査(山梨県)
- ・ 日本竹箴技術保存研究会 代表 下村 輝 氏
(織機の要でもある竹箴の継承と制作)(京都府)
- ・ 京友禅 應壽 佐伯 氏(友禅染 伝統技術保持者)聞き取り調査(京都府)
- ・ 京丹後 縮緬などの白生地製造 八丁撚糸 ※ 予算的に可能な場合実施。(京都府)
- ・ 武州中島紺屋 (藍の建て染め)聞き取り調査(埼玉県)
- ・ 絞り染 前原 前原悠子 氏(絞り染め 伝統技術保持者)聞き取り調査(埼玉県)
- ・ 秩父太織 石塚工房 北村久美子 氏(秩父太織 伝統技術保持者)(埼玉県)
※ 調査取材先は、自然災害や調査先のご都合などにより変更の場合あり。
- ・ 4月～12月:研究調査協力願いを出し、聞き取り調査を行う。着物、染織工芸などを制作する上で、今後、技法材料として不安な部分を抽出するとともに、着物などを制作する上で、あまり知られていない、材料や道具などを調査報告する。実際に、道具や糸などを制作する技術者の方から、その技術を拝見させていただき、レコーダー等で録音し記録とする。
- ・ 11月:文化学園大学 学園祭時に、文化ファッション研究機構研究発表会場にて、伝統技法をおこなうために必要な道具材料などの展示をおこなう。同時に、伝統技法のワークショップをおこなう。展示会場までの輸送費・印刷代などが必要となる。
- ・ 2013年1月～2月:報告書作成用の原稿制作、および入稿作業を予定。

研究の成果

【23年度分】平成23年9月～3月

研究調査先 (※ 調査対象者の記載順は、あいうえお順とした。)

日本刺繍 伝統技術保持者 荒木 のり子 氏・佐藤 典子 氏(糸工房 結衣)

熊谷染 伝統技術保持者 大久保 伯男 氏(小紋染・友禅染・更紗染)

日本竹箴技術保存研究会 会長 下村 輝 氏(日本竹箴技術保存研究会)

※ 岐阜県瑞穂市総合センター「試作竹箴による織布展」における竹羽制作実演の調査取材と撮影(岐阜県穂積町 現:瑞穂市は、当時の竹箴生産の拠点であった。)

- 2012年11月 文化学園大学 学園祭時 文化ファッション研究機構研究発表会場 展示
 伝統技法を用いて制作された作品を展示し、それを中心として伝統技法において制作に必要な関
 わる材料、道具などを展示。

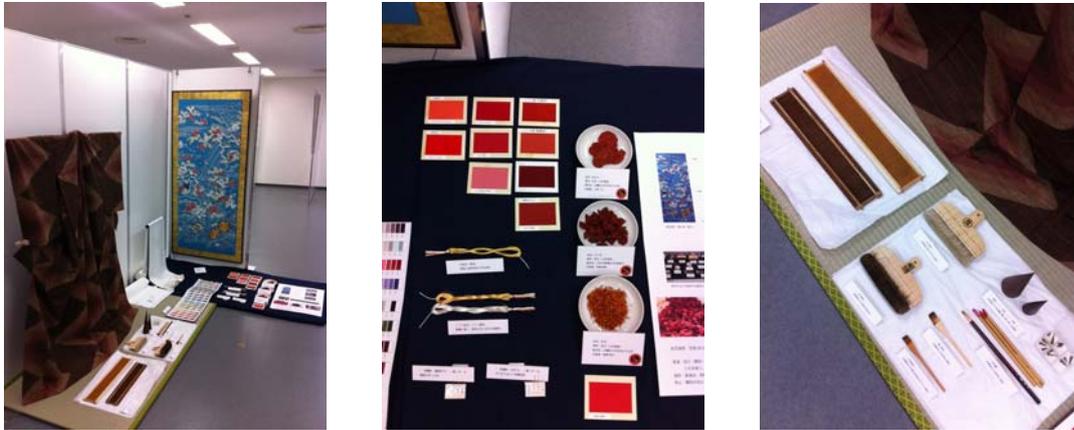


Fig.1 , Fig.2 , Fig3 The situation of research exhibition 2011 研究展示の様子 2011 年

【24 年度分】平成24年4月～3月

研究調査先 (※ 調査対象者の記載順は、あいうえお順とした。)

友禪染 伝統技術保持者 稲木 久 氏(模様師)

紋章上絵 伝統技術保持者 茨木 恒行 氏(紋章上絵師)

小紋染 伝統技術保持者 梅沢 由明 氏(梅沢染工場)

秩父太織 伝統技術保持者 北村 久美子 氏(座繰り、糸染、織)

型染 伝統技術保持者 斎藤 孝子 氏(染色作家)

友禪染 伝統技術保持者 佐伯 昭彦 氏・佐伯 加代子 氏(京友禪 應壽)

友禪染 伝統技術保持者 清水 雄一 氏(東京友禪)

日本竹箴技術保存研究会 会長 下村 輝 氏(日本竹箴技術保存研究会)

※ 横浜市 シルク博物館にて「試作竹箴と織布」展

日本刺繍 伝統技術保持者 竹内 功 氏(東京刺繍共同組合)

面相筆制作 伝統技術保持者 中津 大造 氏(中津筆工房)

地直シミ抜き 技術者 林 克行 氏(有限会社 丸章)

- 2013年11月 文化学園大学 学園祭時 文化ファッション研究機構研究発表会場 展示

伝統技法を用いて制作された作品を展示し、それを中心として伝統技法において制作に必要な材
 料、道具などを展示。研究を通じてわかってきた入手困難な材料、道具に関しては名称の色(文字
 の色を赤、黄色、黒に分けた。)を変え、危機的状況であることを明示。

実際に使用される材料や道具などを展示することで、伝統的な技術を身近に感じ、現在、存在し
 ている作品は、多くの人に支えられ存在しているという点を示した。一つの作品が出来上がる為には、ど
 れだけの道具、材料が必要なのかを示し、今後の価値観の創出を試みた。また、日本刺繍のワーク
 ショップを企画し、来場者に伝統技法を体験してもらい、服飾文化、染織文化の面白さと伝統技法の

貴重さを肌で感じていただいた。ワークショップという実体験を通じての対外的な情報発信の方法などを試みた。

○ワークショップ 日本刺繍

平縫(平面を縫いのない刺繍糸で埋める技法)

駒縫(二本の銀糸あるいは、金糸を用いての糸を留める技法)

現在は、代用銀糸、代用金糸などもあるが、ワークショップでは伝統的な質感、触感を感じるということを大切に、純金糸、純銀糸を用いた。[4]



Fig.9, Fig.10, Fig.11 The situation of research exhibition 2012 & Japanese embroidery Workshop
研究展示の様子 2012 年 および、日本刺繍のワークショップ

実際にワークショップに参加した学生からは、生活の中で伝統的な技術に触れる機会が少なく、文化を間近に感じられて良かったなどの意見をいただいた。また、道具などが入手困難な状況を見て、現状がこのような状況という事をはじめて知ったなどのご意見をいただいた。

23年度、24年度の研究調査取材を通じての研究調査より、キーワードとして以下の共通点が浮かび上がった。

1) 技術を継承するための人材の問題

(組合などに所属する人材の高齢化、道具制作技術者、材料製作技術者の高齢化。染織技術者の高齢化。)

へら1名、刺繍針1名、ともに異なる研究調査先で同一の技術者のお名前があげられた。関東地方では、へらの制作をされている方は、千葉県にお一人の可能性はある。また、手打ち刺繍針に関しても、広島県のお一人のお名前しか上がらないので、現在、それぞれ国内にお一人の可能性は否定出来ない。

2) 道具に関わる問題

へら、針、和鋏、友禅筆、先金、下絵筆、分廻し(竹製コンパス)、口噴き噴霧器、小刀、彫刻刀、上絵筆用竹軸、水椀、赤もろこし刷毛、金属製の櫛(筆用毛を揃える時に用いる)、丸錐、野州麻(筆の根元を締める)などを作り出す技術者の減少と素材そのものが入手困難など(へらは使用前に薄く研ぎ、

弾力を持たせる。刃先に対して正目のへらは先を薄くしても、欠ける事はほとんど無いが、正目になっていないへらは、薄く研ぐと角が掛ける場合がある。現在、正目になっていないへらも多く見られるようになった。)



Fig.5 Koma-Hera 駒へら



Fig.6 Enlargement of Koma-Hera
駒へら 拡大図



Fig.7 Deba-Hera 出刃へら



Fig.8 Enlargement of Deba-Hera
出刃へら 拡大図



Fig.9 Yasyuu Hemp 野州麻



Fig.10 The embroidery needle trained by hand
手打の刺繍針

3) 材料に関わる技術者の急速な減少

- ・ 繭生産農家: 埼玉県秩父市の養蚕農家の数は、現在は17軒。各養蚕量も数十キロ程度の養蚕農家がほとんどであり、毎年、養蚕農家が減少しているようである。神奈川にも数軒の農家があったが補助金の消滅が決まり、すぐに廃業されてしまったというお話である。
- ・ 小紋糠: 染織糊としての用途がほとんどであり、需要の減少により厳しい状況である。
- ・ 糊業者(型染めなどに用いる): 糊業者大手の足立糊料店が廃業。
- ・ 筆用の獣毛(日本産狸毛など): 現在の獣毛は薬品を使用し、抜けやすくして作業をしているが、薬品を使用せず手作業で毛を採集している方は、わずか一名との事である。

- ・ 真竹:竹採集技術者の高齢化、人材不足などが要因となり、竹山の手入れ不足により良質の真竹が減少。
- 4) 分業における工程業者の減少
 - ・ 蒸し業者:都内では1軒とのお話もある。
 - ・ 水元業者:京都にて、以前は手描き友禅専門の水元もあったが、現在は不明。現在は別業者が兼ねて作業をしている。
 - ・ 糊落とし業者(ゴム糸目使用時):都内2軒程度。
 - 5) 伝統文化として触れる場の減少:地域社会が地域の伝統工芸の存在を知らない場合がある。
 - 6) 情報発信および、情報共有の場の減少:

「個々の情報を共有出来ないので、何か行動しようとする時に個人の活動の範囲となってしまう」というご意見も含め、また、上記の道具に関する中でも素材的に共通するものも存在する。例えば、竹箴の制作では、良質の真竹が必要不可欠であるし、また、紋章を描く時に用いる分廻し(竹製のコンパス)も、同様に厚さ8mm以上の良質の真竹が必要とのことである。ただ、残念ながら分廻しの技術者は、現在、すでに見つからない状況である。丸錐なども以前は、鍛金であったようだが、現在は鍍金となっている。現在、見かけられない口噴き式噴霧器も、鍛造と考えられるので、技法的共通点からの再生の可能性は残されている。
 - 7) 技術者の減少による各関係分野における裾野縮小への危機感

「技術を使用する人、それらを理解し用いる人、それぞれの裾野を広げる事が必要」という共通する重要な課題としてもたれている。裾野を広げる事が、伝統技法の継承や文化としての育成につながるのではないだろうか。

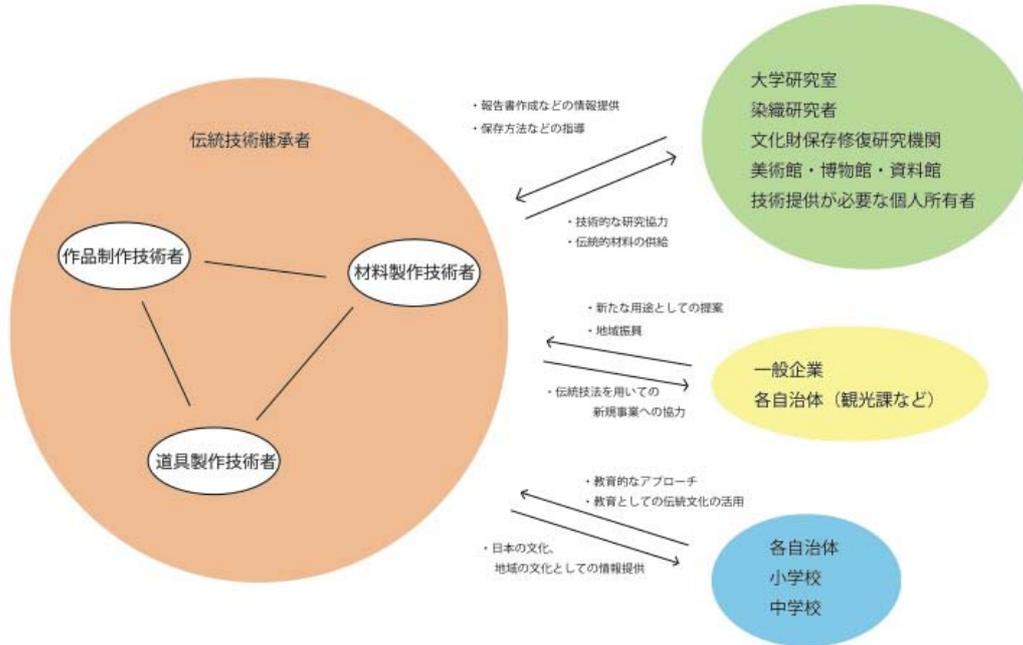
○取材報告書の作成

各技術者、および共同研究員、また関係各所への配布により地域と伝統技術者、若者と伝統文化の結びつきを一つの目的とし、本研究において現地調査をおこなった技術者の声をまとめ500部の冊子とし配布予定である。

本研究を通して15名の伝統技術を継承されている技術者の方と研究調査をおこなった結果、共通する問題点および一部の共通する道具が非常に危機的な状況であることが浮き彫りになった。また、上記のように後継者育成への課題と伝統工芸、伝統文化というものをいかに地域へ情報発信をおこなうかという点が浮き彫りとなった。

先に述べた新学習指導要領の全面実施など、社会から伝統文化、地域の伝統技法継承者への期待は存在する。そのような情報などを求められる可能性などを考慮し、共通する課題の一つでもある「情報の共有と発信」の一助として、下記のような「伝統文化における活用モデル」を考えた。(伝統文化における活用モデル Table1)

Table1 The practical use model in traditional culture 伝統文化における活用モデル



本研究で集約した情報を一元的に管理し、地域学習や伝統技法継承者、また、道具製作、材料制作などの技術者との情報発信手段、また、伝統文化の新たな活用を考慮し、伝統文化における活用モデルとして上記の図[Table1]に示す。

活用モデルを基に、文化ファッション研究機構 FCCL サーチとの連携を提案。実際のホームページ上への表示としては、後述のようなページとして外部に情報提供される。分野横断型の研究の一つの形として、文化ファッション研究機構 FCCL サーチとの協力連携により、さらに効果的な社会への情報発信が可能になった。

以下、「文化ファッション研究機構 FCCL サーチ 染織古典技法継承者一覧」より引用

いま、日本の伝統文化は、日々、失われています。自国の伝統文化を失うことは、自分達の過去を失うこと、アイデンティティの崩壊につながります。それが何をもたらすか、想像することは難しくないでしょう。しかしながら、若手継承者の減少、道具や材料の入手の難しさなど、近年の伝統文化の置かれている状況は厳しい状況に有ります。先人が育んできた文化を活用し、私たちが生まれ育った地域の文化を知ることが伝統文化の継承につながるのではないのでしょうか。伝統的な技術を基に制作されている方々の時代を超えて受け継がれた価値観や世界観も含め、次の未来に繋げる自国の伝統文化として大切に発信していきたいと思ひます。

私たちは、そんなすばらしい伝統技術を継承されている方々を、ネットの力を活用することで、地域と伝統文化を結び付け、組織力とコミュニティーの復興を、さらには経済的な発展にも繋げていきたいと考えています。そのような未来を見据えつつ、まずは「染織に関する伝統技術を持つ方々が、どこに居るのか？」という基本情報を集めることから、私たちはスタートしていきます。[5]



Fig.7 Classic technique successor list (A part)
 古典技法継承者一覧(部分)[5]

※ 道具などの使用感、使用方法などについては、研究取材先の技術者ご自身の感覚、使用方法に基づき記載しております。同様の道具だとしても工夫等で、それぞれ異なる感覚、使用方法等がございますこと、ご了承ください。

主な発表論文等

- [著書] 着物を中心とした染織文化に関する技法材料の現状調査：瀬藤貴史・野口都・阿部明花
- [展示発表] 文化学園大学 学園祭における文化ファッション研究機構 研究発表展示
- 23年度 2011年11月2日、3日、4日
- 24年度 2012年11月2日、3日、4日 ※)11月3日 ワークショップを実施
- 24年度)日本刺繍技術者(高須 氏)により日本刺繍の体験を含むワークショップを開催
- [外部への情報発信] 文化学園大学 フククルサーチ 古典技法継承者一覧 (※研究情報提供)

参考文献

1. 文部科学省:「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」,文部科学省
2. 文部科学省:「小学校学習指導要領 新旧対照表」,文部科学省,pp.1-2
3. 文部科学省:「中学校学習指導要領 新旧対照表」,文部科学省,pp.1-2
 文部科学省 引用掲載確認済 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
4. 福島雅子、瀬藤貴史、林智子:「江戸時代中期～後期の小袖に関する復元模作を通じた研究」,服飾文化共同研究拠点研究最終報告,2010,pp.17-28(2010)
5. 文化ファッション研究機構:「FCCL サーチ 服飾文化情報検索 古典技法継承者一覧」,文化ファッション研究機構, <http://fcclsearch.bunka.ac.jp>